

## 国際開発ゼミ紹介

### 文教大学国際学部：林 薫ゼミ

わが国の大学の革新的な研究と教育の最前線の動向を読者に紹介するシリーズの新たな試みとして、開発途上国において、ユニークな海外研修を実施している「国際開発ゼミ」を紹介する。（本稿は文教大学国際学部の林薫教授に執筆していただいた。）

ゼミ教官名	林 薫
教育科目の名称	専門ゼミナール
学生の学年構成と人数	3年生 13人、4年生18人、5年生3人
海外研修に教官の同伴の有無	有
海外研修参加者の人数と必修か否か	3年中心に12~18名 必修ではない
訪問する途上国の数	ゼミとしてはインドーカ国のみ。このほかにゼミ生が多数参加するプログラムとしてミャンマーでのボランティアなどがある。
海外研修の期間	15日間
学生一人の平均費用	20万円
大学からの財政支援の有無と有の場合の金額	現地での講師謝金、NGOへの委託手数料など。10万円程度（担当科目の教育予算の一部）

#### 1. 海外研修の目的

「専門ゼミナール」という科目は文教大学国際学部では教学の中核的な科目として位置付けられており、3、4年生は必修である。海外研修を経常的に行っているゼミはいくつかあるが、林研究室担当ゼミ（以下林ゼミと略）は2004年に開講後、2005年から2019年まで毎年海外研修を続けてきている。2020年は残念ながらコロナ禍で実施できなかった。2005年から2011年までは、インド、フィリピン、カンボジア、ラオスなど毎年行先を変えて行っていたが、2012年からはインドに固定している。これは学習目標とインドで学べることが一致していること、英語教職課程が設置されており、英語を学ぶ学生が多いため、英語に慣れる実践的な機会を提供するためである。さらに2. で述べるように現地NGOの協力が得られることが大きい。

林ゼミのインド研修（インドスタディーツアー）の目的は開発途上国の現実を知り、さまざまな課題を実地に学ぶ、特にNGOの活動を学ぶことである。特に社会変革の担い手になっているNGOのミッションや活動手法、市民社会とのかかわりあいを学ぶことに重点を置いている。ゼミという科目の一部であり、校外学習という位置づけであるので、教員が必ず全期間同行する。なお、文教大学国際学部ではゼミの海外研修は教員が同行することが原則になっている。

このほかに林研究室がかかわっている研修プログラムとしては毎年3月に行われている「ミャンマー・ワークキャンプ」がある。これはミャンマー・シャン州の山村に2週間滞在して、地元の人々、子どもたちと一緒に作業を行うという、ボランティア活動である。「ボランティア実地演習」という科目として行っているため、これも教員が2名同行する。ゼミ選択前の1年生（2年生進級直前）が主な参加者であり、3年生のゼミ生が若干名参加して指導を行っている。参加人数は総勢15～20名である。参加した学生の中から、林ゼミを選択する学生が毎年何人かいる。

## 2. 海外研修の特徴・ユニークさ

ゼミのインド研修はインド国内のNGOと連携して行っている。OISCA North India というNGOである。このNGOは日本のOISCAのインド支部のような位置づけであるが、インド国内では外国NGOが活動するのは難しいので、インドの国内NPOとして活動を行っている。OISCA North Indiaが国内交通機関の手配、宿泊、安全対策などを担当しているため、教員の負担が著しく軽減されている。また、OISCA North Indiaが行っている植林と環境教育プログラムにも学生が参加することができる。

また、訪問先もNGOが多い。その中には2014年にノーベル平和賞を受賞したカイラシュ・サティアルティ氏が創設し運営する「子どもを守る運動(BBA)」、野外排せつ問題と尿処理カーストの人々の地位向上に取り組み、日本でも名高い「スラブ・インターナショナル」、衣服のリサイクルと女性の生理問題に取り組み国際的に高い評価を受けている「グーンジ」などがあり、インドが抱える社会問題の多様さ、深刻さと、それに立ち向かうNGOのミッションの強さと介入方法の革新性を学ぶことができる。また、これらのNGOに共通する「権利ベース」アプローチにも接する機会になる。

インドの大学生や高校生との交流、それを通じた英語能力の向上も目指している。なお、ミャンマー・ワークキャンプも日本のNGOであるNICE（日本国際ワークキャンプセンター）およびミャンマーのNGOのGIVEとの連携にて行っている。

## 3. 海外研修計画の策定方法

まずある年度の活動に参加した学生が振り返りと評価を行い、次年度以降への勧告・提案を行う。それを基に担当教員が基本プランを立案し、次年度の学生と議論をして計画内容を決定している。また、計画内容は研究室の重点研究内容とのリンクを重視している。この見地からここ三年間、インドの有力研究機関TERIが行っている、ヒマラヤ山中の持続的開発計画を訪問している。これは研究室のメインテーマである持続可能な開発に直結している活動である。

## 4. 研修・研究テーマの策定とチームの編成方法

上記、3に書いたように研修計画とテーマを決定している。研究室・林ゼミの最も主要なテーマは持続可能性であり、サブテーマとして、環境と環境教育、児童労働、公衆衛生（野外排せつ）、衣服のリサイクル、LGBTQ問題、経済発展とインフラ整備などに重点に置いている。これはゼミの日常の学びとリンクしており、上記のサブテーマごとに、学生が自発的なサブゼミを、本来のゼミに加えて実施している。

インド研修の中心は3年生であるが、強制参加ではない。インド研修に参加せず、自分で独自に海外に行って学習する学生もいる。また、人数に余裕がある場合にはゼミ以外の参加者も募っている。

#### 5. 研修・研究の方法論の策定

上に書いたように、研修はあくまでも研究室の研究の一部であるという位置づけである。研修は期間が短いので、簡単なヒアリングを10か所ほどの訪問先（大部分はNGO）で行うにとどまるが、これをきっかけに卒業研究のテーマを決め、現地再訪問も含め、さらに調査研究を進める学生が毎年何人もいる。その後1年間休学し、インド企業でインターンを行った学生もいる。

#### 6. 海外研修の段取りと手配の仕方

アポは最初は研究室（担当教員）が取得するが、そのあとはOISCA North Indiaがフォローを行う。宿泊や国内移動（バス、列車の手配）もOISCA North Indiaに委託する。航空券は各自手配。現地集合。前後の個人旅行可。LCCも利用可である。

#### 7. 現地での研修・研究中の課題等

学生の語学力不足がネックになっている。しかし、インドでそれを自覚する学生も多く、よいきっかけになっている。体調を崩す学生が多いことはいつも大きな課題である。

#### 8. 研修・研究の成果

毎年8月下旬から9月上旬にかけてインド研修を実施しているが、帰国後、9月下旬のグローバルフェスタ、10月下旬の学園祭で報告会を行っている。毎回報告書をまとめている。報告書は幅広く配布している。また、前述のように研修をきっかけとして卒業研究のテーマを決める学生が多い。そのような代表的なテーマとしては児童労働、女性の生理問題、LGBTQ、経済発展とカースト制度などである。

なお、ミャンマー・ワークキャンプも同様に報告書を取りまとめ、グローバルフェスタに出展している。



BBA での、児童労働から救出された子どもたちの対話



環境教育を行っている高校での交流（アグラ）



ウッタラカンド州のヒマラヤの山中で持続可能な山村開発を学ぶ。